
灯夢

zeiss

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯夢

【Nコード】

N1660Y

【作者名】

zeiss

【あらすじ】

十八の春、生きがいを探すため引越しを決意する。やりたい事を探すため、やるべき事を見つけるため、都会の喧騒を離れ、自然豊かな田舎街へと旅立つ。そこで出会ったのは自分とは正反対の人達だった。

夜行列車

頬杖突いて向く先は闇。何の変化も無い、ただ暗いだけの景色。深夜を走る列車から、彷徨うかのように焦点を迷わせる。

きっと、この闇の向こうには、美しい田園風景や山里の情緒あふれる景観が広がっているのだろう。どこか懐かしい古びた茅葺家屋や、いかにも涼しそうな清流もあるに違いない。けれど幾ら目を凝らしても、それが見えることはない。

窓に映るものといえば表情の読めない、つまらなそうな男の顔があるだけだ。何を無くして、何を忘れてきたのか、何かが欠けてしまっている、そんな男の顔だ。瞳が濁って見えるのは気のせいだろうか。それともガラスが単に汚れていて曇っているだけなのだろうか。向き合う瞳に無性な悲しさがこみ上げてくる。

「なあ……お前は何がしたいんだ」

窓に映る自分に問いかけた。求める『何か』さえ分からないまま、その答えを知りたいと切に願う。けれども自分の瞳を見続けるのは苦しくて、結局目をそむけてしまう。答えを知る勇氣さえ、自分には足りていないのだ。

胸の奥がチクリと痛んで、再び窓の奥に視線を向けた。車内の明かりが窓を鏡のようにしてしまつたため、自分の後ろでカーテンを閉めた。

闇は重く、霧のように全てのものを霞ませている。目を細めて、ようやく見えるのは、小さな灯りが一つ二つと緩い線上となり後ろ

に流れていくだけ。目の前の光景はただ真っ暗で、小さな灯さえもいつしか闇に呑み込まれてしまいそうだ。

だからこそ重ねてしまう。自分も大切な何かを見つけられないまま、これから暗い人生を生きていくのではないだろうか。目ぼしい変化も無いままやがて消え、忘れ去られてしまうのではないだろうか。誰にも気に留められず『そんな奴も居たな』と、それだけで終わってしまいそうな、暗雲たる未来が自分を待っているのではないだろうか。このまま自分は消えてしまうのだ。闇に浮かぶ儂い灯が自分に似ている気がして仕方がない。

「……」

そこまで考えて、沈黙を思い出した。そして思わず失笑してしまった。消極的すぎる考えに呆れてしまったのだ。いかにも恥ずかしい。そうに笑う自分が窓に映り、尚更恥ずかしい。

「そうだな」

客観的に自分を見ようと声を出した。生来、自分の性格は明るいはずなのだ。友達に『悩みとかなくて幸せそうだよね』とからかわれる程、楽観的な性格をしているつもりだ。ただ大切な何かが足りてないような、ぽっかりと何かが欠けてしまっているような、そんな気に苛まれるのも一つの事実だ。もしかすると無気力といえる部類には入ってしまうのかもしれない。

気づけば趣味を無くしていた。やりたい事も消えていた。どうすれば時間を忘れられるほど楽しめるのかも忘れてしまった。一体いつから、こうなってしまったのかさえ分からない。学生の際は毎日が楽しくて楽しくて仕方無かったのに。いつの間に『何か楽しいこ

とでもないかな』が口癖になってしまったのだろうか。楽しい事はもはや存在しないようにも思えてしまう。

「楽しいことか……」

答えを教えてくれと、窓を指でノックして思索する。この列車は生まれ育った東京を離れ、右も左も分からない新しい環境へと自分を運んでいる。つまりは引越しだ。

この転換期は、楽しかった日常を思い出させてくれるのだろうか。引越し先はどんな場所で、どんな人達がいて、どんな風に仲良くなれるのだろうか。一見単純そうに見えるそれこそが、毎日を飽きてしまっている現状にはとても新鮮なことにように思えて、少なからず期待してしまう。

「新しい人生でも始めるか」

そう呟いて、自分の発言が退職した人のようだと笑ってしまう。まだ十八年しか生きていないのだ。ただ、今までの人生に一区切りをつけたいという意味では、やはり退職した人と同じ心境と言えるのかもしれない。期待と不安が入り混じるような、複雑な心境だ。

来月の四月には十九歳になる。高校は卒業したものの志望していた大学には落ちてしまった。追うべき夢も、就きたい仕事も見つからない。何もかもが八方塞のような閉塞感に悩まされて、それでもそんな自分を変えたいと思いつち、引越しをしようと今ここにいるのだ。

自分を慰めるため、新たな力付けを得るため。何かが変わると信

じてここにいるのだ。

そうと決まれば、悲観的な考えを思い巡らすのはもう止めにしよう。後ろに流れてゆく儚い灯を眺めて、過ぎてしまった出来事はもはや思い出さないようにと決意する。カーテンをピシヤリと閉めて、椅子に深く座り直した。列車の揺れも、ローカル線特有の向かい合いい座席のもたれ具合も悪くない。

何より溜まった疲れが、列車の振動に伝わって体から抜けていくようで心地良い。これが幸せかと考えて携帯を取り出し、明日の朝にアラームを鳴らせる手はずを整えた。

明日はいよいよ引越し先へと着く。きつと今日以上に疲れる一日になるはずだ。夜更かしをすれば、あくびが止まらない一日になってしまっだろう。

「寝るか」

誰に言うのでもなく、垂れ下がる広告を眺めて目蓋を閉じた。

道中

何度目かの揺れを感じて朝を知る。辺りはすっかり眩しくて、しばしばと見渡す車内は色鮮やかで楽しげな雰囲気になっていた。あくびしながら背伸びをすれば、どうやら疲れも取れているようだ。

列車の音や揺れに気を取られることなく、朝まで寝れた自分の器用さが微笑ましい。隣では、眩しい光を透かした薄紫色のカーテンが早く外の景色を見るようにと催促していた。

「お、起きたか」

向かいに座る、旅仲間は暢気にそう告げて、携帯を眺めていた。

「おう、起きたよ。というか……外すごいな」

カーテンを開いて驚かされた。目を擦っては確かめるように凝視する。窓の向こうには、春を体現したかのような色彩豊かな景色が広がっているのだ。薄紅色の桜に、柔らかそうな緑、あれは何色だっただろうか。

いつの頃か、美術の授業で聞いた記憶がある。緑は緑でも若草色や若葉色、若芽色なんて色もあったはずだ。それがどんな色かは忘れてしまったけれど、小高い山々を覆いつくす淡くて柔らかい、透き通るような緑にも、それなりの名前があるはずなのだ。

「なあ樹、昼と夜とじゃ全然違うのな」

感動を共有したいと旅仲間の樹に声をかける。

昨夜の暗闇からは、目の前の景色など想像さえできなかったのだ。

「そっなんか。昨日は俺、漫画見たまんま寝たからな」

樹は口一杯に弁当を頬張っていた。

「相変わらず、つまらない野郎だな。お前は」

引越し先へと向かう旅なのだ。振り返る思い出も沢山あるだろうに、漫画を読んでいつもと変わらない夜を送っては何の面白みもない。漫画を卒業して、人生のためになる本を読んで欲しいと願うのは幼なじみ故だ。

「いいだろ別に」と樹は笑って、缶コーヒーを口に運んだ。缶コーヒー片手に外を眺める瞳は楽しそうに明るい。

そんな表情に思い出してしまう。

それは樹がここにいる理由だ。そもそも自分は志望していた大学に落ちてしまった。だから半ば投げやりと考えて、祖母のいる田舎に引っ越すのも悪くないと考えた。騒がしくて忙しい都会の喧騒からも離れたかった。静かに自分と向き合い、ゆっくりと将来を考えられればと思った。だからこそ引越しを決意したのだ。

けれど樹は違う。大学には受かっていた。

無邪気な表情で窓から顔を出し、風を浴びては子供のようにはいしやぐ樹に呆れてしまう。その表情には、後悔など微塵の欠片さえ見えない。樹は入学手続きの土壇場になって『来年、もっと上の大学に行く』と急に入学するのを止めてしまった。『そいじゃ俺も一緒に勉強するとよ』と、一緒に引っ越し先まで来て勉強するはめになった。

「なあ、樹。お前本当に大学行かなくて良かったわけ？」

終始、景色に夢中な樹に尋ねた。

「お前しつこいな。いいんだよ、もっと上の大学行くから」
度重なる質問に心底呆れたと、樹は口をへの字にした。そして何も無かったかのようにイヤホンを耳にして鼻歌を口ずさむ。

来年を目指している樹にとって、この引越しは一年間だけの限定

されたものだ。そして自分も、できれば一年以内に答えを見つけた
いと思っっている。今は見えない何かを掴み、やるべきことを見つけ、
自活できるようにするというのが本音だからだ。

「じゃあ絶対、来年受かれよ。俺に付き合わなくたっていいんだか
らな」

これだけは毎回伝えたい気持ちだ。

けれど樹は決まって、

「気にすんな。それより嫁探すんだろ？ 嫁」と、こんな風に話題
を逸らしてしまう。口元を緩ませて、にやにやしながらしきりに尋
ねてくる。そんな表情を見て、どこか自分の悩みが下らなく思えて
しまい、仕方なく話に乗ることにした。

「嫁なら、お前が探せっって」

「そりゃあ、俺も探すけどよ」

当たり前の事を言わせんなよと、高揚した表情で樹は唾を飛ばし
た。その気樂さが羨ましい。

「そもそも探すって、どうやってだ？」

「決まってるだろ。運命的な出会いだよ」

確信を込めた表情が目の前にあった。

「どういうことだ、それは」

その言葉に共感するため、どの漫画を読めばいいか教えて欲しい。
目の前に座る、夢見がちな少年は、同意を得られない事を知ると、
大きな溜息をついた。

「分かってないな、ハルスケ晴祐は」

こんな時に限って人を名前で呼ぶのが腹立たしい。樹は、やれやれと肩をすばめてみせた。

「さりげなくて、甘酸っぱい恋だよ。甘酸っぱい恋！」
分かれよこのニユアンスを、としきりに訴えている。

「それで、運命的な出会いってなんだよ？」

誰にでも理解できるように言えと、強い思いを込めて促した。すると樹は辺りをきよろきよろと見回して、

「そうだな……まあ別に、何でもいいんだけど」と、さっきまでの熱さは何処に行ったのか、しょんぼりと言った。

「お前、馬鹿だろ」

その姿が間抜け過ぎて、思わず、ずっと言いたくて我慢していた言葉が出てきてしまった。

「可愛い子と仲良くなれば、それでいいんだよ」

樹の言葉に呆れてしまう。長い付き合い故に、胸中を察すれば大体の予想はつく。きっと、ひと夏の思い出など、ありふれた展開を期待しているのだ。旅の途中で起こりうるかもしれない、ドラマチックな出会いを望んで車内を見回したのだ。

残念ながら田舎の少子化は進んでいるので若い人など車内にはいない。もし仮に、若くて可愛い子がいたとしても、樹が期待するようなイベントは絶対に起こりえない。

「ほら、寝言ばかり言っでないで、そろそろ着くぞ」

窓から外を眺めれば、旅の終着駅が間近に迫っていた。外の素晴らしい景色も見ずに、実現不可能に思える御伽噺に花を咲かせてしまったのだ。

一夜を過ごした列車を名残惜しく思い、荷物を片付けて、扉へと移動した。

新しい我が家

ガタンと大きく揺れて扉は開いた。ひんやりとした風に迎えられて僅かに鳥肌がたつ。

期待を胸一杯に膨らませて、昔と何一つ変わらぬホームに一步を踏み出した。

ぐるっと見渡せば、錆びた蛇口の水飲み場も、銀色の改札口も、木造の駅舎も、どれもこれも変わらぬままだ。小さい頃は、虫取り網片手に婆ちゃんちに行く日が楽しみでしうがなかった。懐かしさがこみ上げて嬉しくなってしまう。どうせなら、このままずっと変わらないで欲しいものだ。

懐かしさを辿るように駅舎から出て、小さなターミナルを通り過ぎ、川を見下ろした峠道に行き当たる。雨が降ったのか、それとも朝露が降りたのか、しっとりと濡れたアスファルトを荷物を引いて歩いて行く。時折、山の方から吹いてくる風は、やはりまだ冷たい。

樹との下らない話に花を咲かせて、歩き初めてから三十分。道路の分岐と共に道は開けて、田畑と家屋が入り乱れる集落の入口に到着した。山沿いにひっそりと佇む小さな村だ。

道路脇の竹林は涼しそうに揺れていて、細かな陽を散らしていた。そんな光景がやはり懐かしい。

「ついたぞ。あれだ」

小さな裏山を背中に、目的の建物はある。紺色の瓦に白壁が映える平屋の日本家屋。庭は農家故に広く、玄関から母屋まで距離があ

る。

「ハルの婆ちゃん、新しく家建てたの？」

樹は荷物を引きずりながら、額に手をかざして家を眺めていた。

「いや、改築だ。俺もこうなってから始めて来たよ」

祖母は祖父が亡くなってから家を改築したのだが、どういうわけかすぐに老人ホームへと移ってしまった。だから空き家となったこの家に住むのはどうかと勧められたのだ。こんなにきれいで立派な家を、住まずに荒れ廃れさせてはもったいない。

「平屋つてのがまた田舎らしくていいな。縁側もあるし」

樹は庭を見渡して、広い広いと感心した。

「あの畑もうちのだよ」

庭の奥にある畑を指さした。昔は、あの畑でとれた胡瓜やトマトをよく食べさせてもらった。冷水で冷やした胡瓜にはスーパーには無い、本当の胡瓜の味がした。また食べれると思うと嬉しくなる。

「でも色々植えてあるぞ。お前の婆ちゃん、住んでないんだろ」

指摘通り、畑には作物が色々と植えてあった。

畑を売ったという話は聞いていない。それなら誰かに貸しているか、もしくは婆ちゃんが時々来ては世話をしているのかの、どちらかだろう。そもそも、まだ元気なのだ。ホームに移った理由も一人暮らしが寂しくて移ったのではないだろうかと勝手に推測している程だ。

祖父と祖母は、今の祖母を除いて皆亡くなってしまった。だから婆ちゃんは一人しかおらず、爺ちゃんはもういない。そう考えると婆ちゃんの寂しさも良く分かる。

荷物を縁側一杯に放り投げて、玄関を開けるための鍵を取り出した。銅褐色をした鍵は所々錆付いて、昭和の風情を醸しだしていた。

「開いた開いた。それよつと」

日本家屋特有の、スライド式玄関戸をガラツと軽快に開け放った。
「おお、畳の匂いがする」

電気のついていない暗闇から、鼻をつく匂いがした。

「カビ臭くは無い？ 本当だ、畳の匂いがする」

肩をぶつけて、あまつさえ押しやって、樹は嬉しそうに我先にと靴を脱ぎ散らかしたまま、真っ暗な廊下の向こうへと消えていった。

家主の孫を差し置いて、勝手に上がりこむ無神経さに呆れ、けれどもいつものことだと笑ってしまう。戸が閉まっているために家中はどこも暗い。案の定、樹はスイッチが分からないと遠くで一人騒いでいた。

「時々、掃除とか喚起してくれたっばいな」

ようやく玄関の灯りをつけて、床や靴箱を見渡した。人の住んでいない家とは思えない程、塵や埃は一つとして見当たらなかった

婆ちゃんは、今日を見越して掃除をしてくれていたのかもしれない。
い。

「おい、ハル。手紙が置いてあるぞ」

暗闇の向こうから樹の声が聞こえた。

「婆ちゃんからの手紙だろ。きつと掃除もしといてくれたんだな」
靴を脱いで家にあがる。

樹の声を辿ると、灯りをつけた居間に樹は座っていた。テレビをつけながら、ちゃぶ台に肩肘ついて、けれども視線は携帯に落としていた。

「お前の家じゃないんだけど」

くつろぎすぎだ。せめて戸を開けて換気して欲しい。ちゃぶ台の上には手紙が置いてあり、封は閉じられたままだった。さすがの樹もそれは勝手に読まなかつたらしい。

「何だつて？」

蛍光灯の下で読む手紙を、樹が横から覗く。風呂の沸かし方や、ガスの締め方、戸締りの仕方、緊急連絡先などが書き綴ってあった。「ハルの婆ちゃん、しっかり者だな」

樹は心底感心してみせた。

確かに掃除までしてくれていたのなら用意周到だ。不覚にも、婆ちゃんに会いたくなってしまう。

「明日あたり挨拶に行かないとな」

今日は今日で、やるべきことが山積みなのだ。部屋をぐるっと見渡して畳を数える。

「ここが居間で十二畳か。婆ちゃんの部屋以外は自由に使っているらしい」

手紙を読み終えて、ちゃぶ台の上に落とす。

平屋と言えど、家の広さは一般の二階建て住宅より広い。部屋数が襖を隔てて無数に存在する。

陽射しが恋しいと襖を開けて、雨戸も開けてゆく。幾つもの部屋の間を開けて、程なくして縁側のある畳部屋に行きあたった。慣れない手つきで最後の雨戸をスライドさせると、目を瞑りたくなるような眩しさと暖かい風が飛び込んできた。

「やつぱいいな、ここ」

懐かしさがどっとこみ上げて、子供の頃に戻ったかのような感覚に襲われた。

縁側のある畳部屋、ここから望む景色は昔からの絶景だ。
小さい頃は、この部屋を陣取るため兄と言い争ったのを覚えている。

春は桜吹雪、夏は入道雲、秋は真つ赤な紅葉、冬は雪景色、その
全てが堪能できる部屋なのだ。

縁側に立って、家の中に春を呼びこんだ。開け放った窓からは澄
んだ空気が吹き抜けて、改めて新しい我が家の広さを教えてくれた。

庭には桜が咲き誇り、風が吹くたびに花びらを吹雪かせている。
目を凝らせば、遠くには雪をかぶった高い山も見えていた。

「よし、メシ食いにどっか行こう」

来て良かったと、心からそう思う。好奇心を掻き立てる景色に元
氣付けられて、ここからの毎日に期待を膨らませる。これから住む
家が満足のいくもので本当に良かったと。

家に戻ったのは二十時を過ぎてから。昼食を取り、引越しに必要な
生活用品を一通り買い揃えることができた。夕食と風呂を簡単に済
ませると、一日の疲れがどっと襲い掛かってくる。

今はもう眠くて仕方が無い。まだまだ片付けやら整理やら、やる
べき作業が沢山残っているというのに、居間で風呂上りの火照った
体を冷まそうと横になると意識が遠のきそうで苦労する。指の力を
借りないと目蓋が閉じてしまいそうだ。

動こうとしない体に、振り絞れる気力さえ使い果たした事に気づいて片付けを断念する。

湯気にあてられて朦朧としたまま、ダンボールから布団を引つ張り出した。それからボタンと音をたてて盛大に倒れこむ。隣を見れば、樹は既に布団の中だ。

お互い自分の部屋の片付けが済んでないので、今日は居間の隣の部屋、縁側に面した部屋で一緒に寝ることになった。火照った体を包むように、布団からは懐かしい匂いと温もりが感じられた。

仰向けになり天井を見上げ、意識が薄れゆく中で思い返す。今日一日が、とても充実していたと。

とにかく忙しくて、あつという間に夜になってしまった。明日が楽しみだと思う、この気持ちも久しぶりだ。

明日はもっと楽しくなる。そう期待してまどろみに身を委ねた。

朝の騒動

眩しさから逃れるように寝返りを打ち『ああ、引越して来たのか』と思い出す。

今が朝であるなら、時間的には十分寝れたはずだ。けれど、ついさっき片づけを断念して寝たような気がする程、まだ疲れはとれていない。

全身を襲う気だるさが、もつとぐっすり眠れと強く催促している。せつかなので、まどろみに身を任せて再び目蓋を閉じた。同時に先程から煩わしい何かに文句を言うことにした。

「やめろって……。痛いっての」

なぜか脇腹を執拗に叩かれていた。それは強く、本当に痛い。右手で空中を鞭打ち、不快感の元凶を探った。まだまだ眠っていたいのだ。

「おい樹、なんだよ。やめろっての」

こんな朝方に何の用事があるというのだ。乱暴な起こし方をする樹に、ろくな起こされ方をしないで育ったに違いないと推測する。しつこく続く頭上からの声に呆れて、仕方なく耳を傾けた。

「……兄ちゃん。兄ちゃん！」

聞こえてきた声は、よく知る樹の声ではなかった。

疲れに溺れて悪夢を見ているのだろうか。不思議に思い、重い目蓋を開けて、ぼんやりと声の主を見た。けれど窓からの日差しが眩

しくて、声の主をまともに見ることはできなかった。

おかしい。窓なら、昨日の夜に閉めたはずだ。

「兄ちゃん兄ちゃん。文江さんの親戚の方かい？」

耳に響いたのは、はつきりとした知らない男の声。

「……は？」

朝ボケの朦朧とした意識が急に熱くなるのを感じて、急いで布団から飛び起き、声の主を凝視した。

チカチカと眩しさを我慢しながら見た人物は、全くの知らない赤の他人だった。

「誰だあんた！ 何やってんだここで！」

現状を理解できない怖さを克服しようと、精一杯の威勢を張って侵入者を牽制した。ところが侵入者はひどく呑気で「ようやく起きたか」などと気の抜けた反応を見せていた。

「何をやってんだって……あ？」

口から発する言葉は徐々に小さくなり違和感を感じる。

どうにか眩しさに慣れ始め、身構えながら侵入者を見ると青いワイシャツ姿をしていた。そんな姿や呑気な態度が明らかにおかしい。

まず泥棒という格好ではない。泥棒の格好を見たことないがワイシャツ姿で泥棒する人間はいないはずだ。それに青いワイシャツには、見覚えのあるバッヂが付いていた。それはつまり。

「警察？」

「そうそう警察。警官だよ」

にこっと笑った中年男性は、あぐらをかきながら帽子で顔を仰い

でいた。

「いや、だって、え？」

納得しかけて、やはり納得できなかった。警官が目の前にいる現実が理解できないのだ。つまり悪いのはこちらだろうか。

過去に犯罪を犯した記憶は無い。それでも、もしかしたらと思い浮かぶのは、昨日道端で用をたしてしまっただけくらいだ。コンビニどころか建物が無い道だったので最後の手段だった。しかも小だ。まさか、それで自宅まで来たという追跡劇はないだろう。訳が分からない。

「なんで……いるんですか？」

身の危険はなくなっただけで体の緊張を解し『両手を前にだせ』と言われないためにも敬語を使う。

つまりは執拗に脇腹を叩いていた人物は樹ではなく警官だったわけ、それなら樹は一体何をしているのかと振り返る。まさか、この騒ぎで呑気に寝てはいないだろうと振り返って愕然とした。

樹は布団にくるまり丸まっていた。丁寧に頭の前から足の先まで布団をかぶり、音も光も全ての干渉を拒絶していた。

まったくどうかしている。もしもこれが警官でなかったら、本当に泥棒だったなら丸まったまま死んでいたかもしれないのだ。

感じる苛立ち全てをこめて、丸まった布団を蹴った。

「おい樹、ふざけんな！ 起きろ！」

いくら蹴ってもモゾモゾするばかりで、まるで進展がない。仕方無しに踵落しを布団の上からくわすと、ようやく期待していた通

り『うつ……』と、うめき声が聞こえた。

これで起きるだろうと、後ろでしつこく「君、君」と繰り返す警官のおっちゃんに向き合った。

「君、君、文江さんの孫か何かかい？」

その当たり前の質問が、尚更癢に触る。『孫に決まっているだろうが』と心の中で叫びながら、それでも大人な対応をと、警官相手に落ち着いた反応をみせることにした。

「孫ですよ……昨日から来てるんですけど」

多少ぶらつきらばうに言ってしまうのは仕方ない。返答に安心したのか、警官のおっちゃんはハンカチで額の汗を拭きながら、いやはやと笑った。

「やっぱりそうかい。居ないはずの家に誰かが寝てるもんだからねえ。びっくりしちゃったよ」

あえて言わせて貰っていいだろうか。

「一番びっくりしたのは俺ですけど」

それだけは声を大にして伝えたい。

叩かれて起こされれば、枕元に知らない中年男性が座っていたのだ。しかも警官だ。びっくりしたのがこちらでなくて、誰だというのだ。

ニコニコ顔の、人柄の良さそうなおっちゃんの顔を見て、はっと思い出す。

それは、昨日しておくべきだった重要なプロセスを忘れていたという過失だ。

引越したからには、まず近所に一報を入れとくべきだった。土産もそえてだ。田舎は近所付き合いに真面目で、それだけ敏感なのだ。

見知らぬ人が婆ちゃんの家で寝泊りしていると、どこかの誰かに勘違いされたに違いない。

けれども、おかしいと。そこまで考えて何かが矛盾している事实に気づいた。それはなぜ今朝、寝泊りしている現状に気づいたのだろうかとの疑問だ。

確かに昨日のうち、何回かは家を出たり入ったりした。通報されるのなら、その時に通報されているはずなのだ。

それが今朝に通報されている。それは今朝に寝泊りしている事实に気づいたということではなからうか。加えて警官が難なく鍵のかかっているはずの家に侵入できているのも不思議だ。映画のように拳銃でドア鍵でも吹っ飛ばしたのだろうか。

頭の中は高回転、けれど顔は浮腫んだままの無表情であれこれと一生懸命考える。

だから、そんな中で寝ている男を許せるはずがない。立ち上がって、多少の抵抗を無視し樹の布団を引き剥がした。

「いい加減起きろっての」

樹はいつの間にか顔をだして、両足をだして、スヤスヤとあどけない寝顔で睡眠状態へと移っていた。現状の全てを無視して、今から二度寝するつもりなのかと樹の布団を剥いで、脇腹を蹴った。

続けて後ろを振り返り、ずっと困ったように笑らっている警官に「どうやってこの家に入ったんですか」と尋ねた。

「ああ。それはねえ」

警官は誰かを探すかのように、後ろで開け放たれている窓に目をやった。

窓の外では、割烹着姿の主婦達が心配そうな顔でこちらを覗いていた。その姿に、やり場の無い怒りを感じて溜息を吐く。初日から一体何なのだ。

「えっとね」

終始スローペースな警官が、ゆっくりと口を開いた時。

「おい晴祐！　なんだこれは！」

片手で掴んでいた布団は引っ張られ、樹が仁王立ちよろしく、勢いよく起き上がった。

その姿を見て言葉を失う。髪の毛を見事に逆立てて、パジャマは乱れに乱れていた。口をぽかんと開け広げ、一人威勢良く立っている。その姿は、縁側を通して外にいるその他大勢に丸見えなのだ。

「ふざけんなよ、お前」

そのまま何処かに行って消えて欲しい。

固まったままの樹を見て呆れてしまう。黙れと一喝しようとも思ったが、乱暴に起こしておいて、さすがにそれは可哀相だと思い留まった。

それでもこういう状況ほど説明が面倒だと思うことはない。現状

から雰囲気を感じ取って、理解して欲しいものだが。

「俺らが、勝手に婆ちゃん家に侵入したと思われてんだよ」

目と口を大きく開けている樹に説明する。親切にも警官が説明を加えてくれた。

「そうそう。変な人たちがいるって通報来たもんだからね。いやあ、身内さんだったとは」

身内に決まってるだろう。何が楽しくて、侵入してからスヤスヤ眠る泥棒がいるのだ。居心地が良くて寝てしまいましたと。そう突っ込みたくて、けれども警官はやはり怖いのでやめておいた。

そしてもう一度、質問する。

「それで結局、誰が俺らを見つけたんですか？」

ふと、質問と同時に、二人の人影がずっと逃げるように窓の影に隠れたのが見えた。故に同時に理解する。通報したのは多分、あれなのだ。

「えっとね。文江さんの畑を世話してくれてる子達がね。文江さんから直接鍵預かってるみたいだよ」

「……鍵を？」

さらりとんでもない実態を知らされた。

鍵を渡してあるなど、随分と親しい人がいたものだ。少なくとも孫である自分は聞いた記憶がない。

この家はいつから公共で使われるようになったのだ。

「さっきまで、あそこにいたんだけどな」

おかしいなと、警官は首をひねった。

「そうですか……」

朝起きて、ずっと緊張していたせいか、今更になって考えるのが面倒になってしまった。

現状把握は完了した。けれど、ここからどうすればいいのかは分からない。遠くでは『ガラガラガラ』という朝を印象付ける陽気なうがいの音が聞こえていた。

「い、いつき!？」

驚いて見回すと、いつの間にか樹がない。

それはつまり、これからどうしたものかと自分が悩んでいる今、この瞬間に、樹は朝のおめかしをしているのだ。確かに樹は居候の身だ。だからといって、全てを人に任せ、自分は関係ないと、思うがまま自由に行動してもいいのだろうか。理不尽な現実には頭が痛くなる。

引越し翌日の朝。新しい環境には期待していたけれど、正直こんなサプライズは望んでいない。

頭の中に溜まった、もやもやしたものを腹の底に下らせて、気道に登らせ盛大な溜息で吐き出す。

そんな濁った感情を汲み取ってくれたのか警官は、

「それじゃあ、安心したところで私は帰るかな」と帽子を被った。

「そうしてください。って、ちょ……」

警官は、よっこらせと人の枕を踏んで立ち上がった。おせじにも綺麗とは言えない所々茶色く染まった白い靴下で。

「ここは良い所だから、ゆっくりしていくといいよ。それと文江さんにもよろしくと伝えといてね」

そう告げた警官は、こちらに来て肩をポンポンと叩いて、縁側から外に出て行った。警官らしからぬ、優しくて柔らかい物腰をした背中丸っこくて熱そうだ。

「お孫さんだつてよ。良かったねえ。心配ないよ」

警官が野次馬にそう言くと、主婦やジョギング姿をした男性が、大笑いをしながら散り散りに帰っていった。

しばらくして野次馬が消えると警官も庭に止めてあつた白い自転車に跨り、手を振りながらフラフラと消えて行った。

招待

どれくらい呆けていただろうか。

ようやく静けさを取り戻した新しい我が家。望んでいたはずの平安なのに、なぜか体が動こうとしない。小鳥が囀る中ぼつんとした虚しさに襲われた。無理やり騒ぎ立てられて、いきなり放っておかれるような、一発屋の芸人が味わいそうな虚しさだ。

「まったく何だってんだ」

ようやく言葉を吐き出して、ゆっくりと立ち上がる。

未だ開きっぱなしで冷たい風を寄越すガラス戸を閉めようと縁側に出た。

すると二つの人影が視界に飛び込んできた。それは、こちらを確認すると驚いた表情を見せ、そのまま固まってしまった。

どうやら、ずっと戸袋の陰に潜んでいたらしい。見れば歳の近そうな女の子二人だ。それでいて憎き通報者でもある。

「通報したのって……君達だよね」

二人はビクンと体を強張らせ、お互いの体を寄せ合った。

その反応は、自分たちが犯人だと認めているようなものだ。二人は居心地悪そうに、何を言っているのか分からないと心底悩んだ表情をしていた。

やれやれと背中をかいて考えた。

彼女達は、きつとご近所さんか何かで、婆ちゃんが色々とお願

をしていたのだろう。そう考えると、目の前の彼女達を怒るに怒れない。

良かれと思って警官を呼んでくれたのだ。警官の言葉を思い出すなら、畑の管理と一緒に、家を掃除してくれていたのも彼女達であることに気づく。

「さっき聞いたけど、畑の世話とかしてくれてんだよね」

頭をぽりぽりとかいて、できる限りフレンドリーにと心の中で復唱しながら尋ねてみた。

「と……時々ですけど」

視線を合わせようとしない彼女達は、振り絞って出したかのような声で謙虚に告げた。怒っていいはずなのに怒れず、しかもこちらが悪者みたいで非常にやりづらい。

結局、推測通りなら感謝する理由はあるとしても責めることはできないだろう。婆ちゃんの家を不審者から守るために、今朝の出来事を起こしたのなら尚更だ。

「ここじゃなんだし、居間を整理するからあがってよ」

そう告げて居間に向かう。事の真相は話を聞かなければ進まない。

早速、迎え入れるための準備に取り掛かった。招きの返答を待てば断られてしまうので半ば強制的だ。後ろで「いえ」と遠慮した言葉が聞こえたが、もちろん聞こえない振りをして無視をする。

「いつきー。畑と家の掃除してくれてたのって、あの人達だつてさ」
一足先に、おめかしを済ませた樹は、居間でござごとと荷物を整理していた。寝巻き姿の自分とは対照的に、ジャケットとジーンズを着こなして、完全にお出かけ姿だ。

「マジか、そうだったのか」

樹はびっくり仰天な顔をしてみせた。

「……」

全てを人に丸投げして、その反応はない。空返事だけは立派で腹立たしい。近くにあつた雑誌を丸めて樹の頭を殴った。

「いつてえな、何すんだ」

「少しは手伝え」

散らかったタオルや座布団を樹に投げた。無能っぷりに腹をたてているので、顔をめがけて強く投げ込んだ。それでも何の反応も示さず、かえってだるそうに片付ける樹が本当にどうしようもなく、実に腹立たしい。そして断られないようにと笑顔で振り返る。

「片付けたから入っていいよ。遠慮しないで、どうぞどうぞ」

埃が朝の日差しにあてられて騒がしく舞う中、縁側の向こうの彼女達は互いに数秒向き合い、それから仕方無さそうに頷いた。

「おじゃまします」

来客用座布団らしきものを押し入れから引つ張りだして、彼女達を座らせる。畑仕事をしていたためか、決しておしゃれとは言えない、青いジャージ姿をした彼女達はちょこんと座って不安そうだ。

「そりゃそうか」

聞こえないように呟く。

彼女達の心情を察するに、突然、男二人が暮らす家に招待されれば確かに困るだろう。身を寄せ合つては、俯きがちにこちらの様子を伺っている。気まずい雰囲気を払拭するために、片付けついでに会話を交わすことにした。

「いつも掃除してくれてんだよね。助かったよ、ありがとう」

純粹な感謝の気持ちだ。

彼女達を見て、いつしか嬉しくなっていた。婆ちゃんには鍵を渡して、家の管理を任せられるほど信頼できる人がいたのだ。よほどの信頼関係を築かない限り鍵など渡せない。もしかすれば彼女達のおかげで爺ちゃんが亡くなっても孤独を感じることなく、楽しく過ごせていたのかもしれない。そう考えれば孫としては嬉しいものだ。

「い、いえ。そんな大したことしてないです」

しどろもどろになって否定する彼女達は、さすがにまだ気を許してくれないらしい。そんなやり取りが少し笑える。

「でも助かったよ」

気づけば朝の出来事から来る苛立ちは消えていて、心は軽く爽やかだ。樹がお茶を持ってきたところで、ようやく四人でちゃぶ台を挟み座ることにした。

親睦

「実は、昨日引越して来たばかりなんだよね」

彼女達の警戒心を少しでも解そうと、こちらの紹介から始める。

ここに来るまでの経緯を順を追って説明していく。

「婆ちゃん、何も言ってなかったのか」

「何も聞いてないですけど……」

だから悪いのは私達じゃないですと、そう言いたげに正面に座る子は拗ねた言い方をした。未だぎくしゃくした雰囲気から抜け出させそうにない。

それにこの二人、よくよく話を聞いてみれば、ご近所さんでもなんでもなく、畑を無料で借りる代わりに家の手入れをしてくれていたらしい。婆ちゃんと彼女達の親同士で親しい交友関係があるとのことだ。

話すべき内容を終えて、会話が止まり沈黙が辛くなる頃、天井を見上げて肩の力を落とした。

さて、これからどうしようかと悩んでしまう。

「あ、あの知ってます？」

静寂を破るように、突如、居間に明るい声が響いた。

「この子、実は熊手で殴ろうとしてたんですよ」

驚いて視線を正面に戻せば、しみつたれた雰囲気吹き飛ばすように、とびきりの笑顔を浮かべている子と「言わないで言わないで」と必死に懇願している子がいた。

拗ねていたはずの正面の子が、隣の子の口止めに必死になってい

た。

あまりの展開に何が起きたのか分からないでいると、
「もうだめっ。言わせてもらっから」と、とびきりの笑顔をした子がもう耐えられないと嬉しそうに顔を輝かせた。

「やめて、友子、言っちゃダメだって」

その動揺した表情から理解する。どうやら喋るなと懇願する正面の子が通報した本人であるらしい。後ろで結んだ髪を激しく揺らし、手を伸ばしては隣の子の口を塞ごうと懸命だ。

通報したのはお前かと、苛立ちは消えたと思っていたのに、いざ犯人が分かれば、冷たく睨めるほどには苛立ちが残っていたらしい。視線に気づいたのか、正面の子はますます表情を焦り顔に変貌させて応戦し始めた。

「だって、よくお爺ちゃんが熊手もってイノシシ追ってたし！」

顔を真っ赤にさせ、泣きそうな顔をして弁解を始めた。困り果てた感情がひしひしと伝わってくる。

「家の中にイノシシは居ないでしょ」

隣からは、忘れかけていた懐かしい声が聞こえてきた。黙っていた樹が狙ってか狙わずか、爽やかな顔してボケたセリフを飛ばしてきたのだ。ややこしくなるので、できれば黙っていて欲しかった。

「そうですよねー。この子抜けてるから」

友子と呼ばれた子は、まさしく満面の笑みで嬉しそうに頷いた。

「イ、イノシシじゃなくて！」

「涼音は昔からこうなのよ」

子供をあやすように、隣の子は正面の子の頭を撫でていた。

「涼音……涼音ね」

反復して記憶する。脳に深刻なダメージでも受けない限り、その名前を忘れることはないはずだ。今朝の出来事で向こう一年のサプライズなどいらなくなったのだから。

「そっぴや、名前言うの忘れてたね。俺、中野樹、よろしく」

にこやかに笑って、樹は自己紹介した。誰も聞いてないのに、家主の孫を差し置いての自己紹介だ。

「俺は秋津晴祐ね。ハルスケでいいから」

告げてから気づく。自分でも分かるほど、ぶっきらぼうに自己紹介してしまつたと。にこにここと楽しそうな樹とは正反対だ。

「歳いくつなんですか？」

「十九だよ」

げんなりした調子で答えた。

「同い年じゃん。何か不思議！」

友子と呼ばれた隣の子は相変わらず明るく言ってみせた。

「わ、私はハル君が昔来た時、遊んだことあるから知ってたよ？
気づいたのは、さっきだけど……」

そう続けたのは正面に座る涼音さんだ。そんな彼女の表情を見て、ぽかんと呆氣にとられる。『あんた誰？』という発言が喉まで出かかつて寸前で止める。彼女はそれこそ顔を赤くして、恥ずかしそうにしていたからだ。そして思い出す。

「あ……、ああ」

言われてみればと、記憶が蘇る。

「そっぴえば、ちっちゃくて可愛い子が遊びに来てくれたことがあったな」

田舎に来ても数日が経つとすることがなく、団扇片手にだれていた小学生の頃。婆ちゃんが同い年の女の子を連れて来てくれて一緒に遊んだ記憶が確かにある。その女の子は半ば強制的に自分を遊びに連れ出した。見かけによらずスタミナがあり、最後の方は付き合いきれなかったのを覚えている。

「そう、それ私！ えと、私は氷川涼音って言います！」
ちっちゃくて可愛いというリップサービスを快く受け取ってくれたらしい。そこは逆に突っ込んでくれないと困るのだが。

「思い出したよ。そういやスズって呼んでたな・・・」
朧げな記憶が徐々に引き出されてゆく。遊んだのは幼い時のほんの数回だけだ。山や川や学校に連れて行って貰い、楽しかったのを覚えている。

けれど、どうせ思い出すなら、朝の寝顔を見た時点で思い出して欲しいものだ。警察に通報を終えた今更では遅いんだと溜息をつく。

「よろしくっ」

樹が歯切りのいい声を発して、ちゃぶ台の上で片手を伸ばした。右手を涼音さん、もとい氷川さんに向けて。

その仕草に、皆が顔にはてなを浮かべ時間を止めた。長い付き合い故か少しの間を置いて理解する。

「握手か……お前それセクハラだぞ」

樹は握手をしようと手を差し伸べていたのだ。驚いて、困惑し、右手をかばい、けれど仕方なくすくすくこと手を差し出す氷川さんが可哀想に見えた。

「あつはっは。私は、白井友子、よろしくね」

隣に座り、終始氷川さんをいじめていたショートヘアの子の苗字も判明した。白井さんも楽しそうに笑って樹と握手をしていた。もちろん自分はしない。断じてしない。

ようやく場の雰囲気も柔らかくなり、お互い色々と話せるようになった。氷川さんも人見知りなだけで打ち解ければ明るく話してくれる。彼女達は朝のハプニングを熱く語り始めた。

延々と繰り返す話を要約すれば、まず氷川さんが最初に鍵を開け、自分達の健やかな寝顔を見たとのこと。めったに見せない、あどけない寝顔だったろうにそれを見た氷川さんは一目散に逃げたのだ。そのまま倉庫に走り、熊手を取り、引き返して玄関に入りこんだ所で白井さんに捕まったらしい。白井さんが『そんなことしたらだめだよ』と諭し氷川さんは仕方なく同意した。

だから白井さんに感謝しなければならない。

熊手で叩かれていたら、きっと今は病院のベッドの上だ。

それから氷川さんの『じゃあどうするの?』の問いかけに白井さんが『普通に起こせばいいんじゃないの?』と言うが『だめ。警察呼ぶっ!』と氷川さんが地元交番にTELをしたというわけだ。一〇番ならパトカーが来てしまうため、そこは抜けた性格で助かった。交番に電話してくれたので、あの柔らか警官のおっちゃんに来てくれたのだ。

それにしても、と考えてしまう。

熊手で殴って追い返すなんて、本当に強盗が相手ならその手段は危なくないだろうか。理解不能なので『まあ田舎だからな』と無

理矢理に納得するしかない。

会話に会話を重ねている彼女たちは『やらなくて良かったよね』
・『だよね』と未だ目の前で盛り上がっている。そんな和気藹々とした雰囲気壊したいとは思わないので一緒に笑い合う。それでもいい加減、疲れてしまった。

柱の掛け時計を見上げると十時を過ぎていた。未だ朝食も取っていない。そろそろ潮時と考えて行動に移すことにした。

「もう十時か・・・」

そろそろ解散したいと、気持ちをこめて言ってみた。よくこんな時間になるまで話せたものだ。

「ホントだ。朝食食べてない俺ら」

よく言ったと、樹を心の中で褒める。あとは彼女達が『失礼しうか』と言ってくれば全てが順調に進むはずだ。

ところが、彼女達は二人で顔を見合わせて嬉しそうに口を開けた。
「それじゃ、ご飯食べれる所に連れてってあげようか？ まだこの辺詳しくないでしょ」

なぜか得意げに勧められた。予想していなかった返答に驚く。

「ほんと？マジで？」

隣では食いつくように、樹が嬉しそうにした。

「うん、全然いいよ」

「そうしてくれると助かるよな、ハル！」

樹のきらきらした瞳にたじろいだ。視線を自分・白井さん・自分・白井さんと何度も往復して喜んでいる。

はつきり言わせてもらえば寝させて欲しい。朝からどれだけ氣力を使ったか、思い返せば計り知れないからだ。それでも、近辺を教えしてくれるという提案は助かるわけで、樹もそれを望んでいる。仕方無しに同意することにした。

「そうだな、この辺、何も分らないしな」

家の前の県道を下り、駅に向かう以外は右も左も分らない。近くには買い物しやすい商店街があるかもしれない、バイトできそうな場所もあるかもしれない。

「いいよ。今日は予定無かったし、お詫びも兼ねてってことで」

氷川さんも、顎に指をあてて同調してくれた。

「ついでに、婆ちゃんのとこ行って挨拶してくるか」

それが今日、やらなければならない重要事項なのだ。朝食取る前に婆ちゃんに挨拶しようとして決めて、身支度を始める。白井さん達に戸締りを手伝ってもらい、倉庫から使い古された自転車を引っ張り出して、いざ見ず知らずの田舎街へと出かけて行くことにした。

祖母

「後で行くからな。またな」

ガラスの引き戸が勢いよくドンと閉じて、手が挟まれそうになった。

「すげえな、ハルの婆ちゃん」

婆ちゃんは扉の鍵を閉め、颯爽と老人ホームの中へと消えて行った。久しぶりだというのに、にべもない反応だ。

「文江さんらしいね」

氷川さんは笑って、まるでいつものことのように言ってみせる。

「いつも、あんな感じなの？」

孫ながらそれは知らなかった。

「いつもだよ。お友達さんが多いみたいだからね、文江さん」

「それはつまり、婆ちゃんは久しぶりの孫より、いつでも会える友人を優先したのか」

心に微かな痛手を受けてしまう。

「というか、若々しいよなハルの婆ちゃん」

樹が妙に感心していた。

「それ、褒めてんの？」

「悪くはないと思うけどな」

樹の言う通り、確かに悪くはない。人間そのくらい愛嬌があるほうが良いだろう。元気なのも何よりだ。それでもせっかく土産持って訪ねたのだから、もうしばらくは居させて欲しかった。

「そんなに、卓球が好きなのか婆ちゃん」

追い返す理由はホームで卓球大会があるから。

「それは知らないけど？文江さん何でもできるんじゃない？」

孫以上に孫らしく、優しくそんな微笑を浮かべて氷川さんは言ってみせた。

「元気でいいじゃんか。ハルの婆ちゃんいくつだよ？」

「七十後半とかそこらだった気がするけど」

そう考えれば、ホームの中では若い方なのかもしれない。

「まあいいか。後で来るって言ってたしな」

頭を切り替える。もはや消えてしまった婆ちゃんの事で、ぐだぐだと呟いても仕方が無いからだ。朝の出来事を伝えたとしても、どうせ流されてしまうだろう。

今はまず、婆ちゃんが元気だということさえ分かればいい。久しぶりに見る近しい親戚なわけで、これから会おうと思えばいつでも会えるのだ。ただ婆ちゃんの自己中心的な性格が、どこか自分と似ていて恥ずかしさを覚えた。

「それじゃあメシ行こう、メシ」

樹は意気揚々に白井さん達の元へ駆けて行った。

「はいはい。涼音いこっ」

白井さんは氷川さんの腕を引っ張って先陣を切った。

その後ろを、嬉しそうに付いてゆく樹は嬉しそうだ。どちらがストライクだったのか、後で聞かなければいけないと思うほどに。こうして、どこにでもあるファミレスだけには行かない事を願って彼女たちに朝食を委ねた。

「いやあ、午後は充実してたな」

暗闇の中、街灯の下でオレンジ色に照らされた樹は艶やかな顔を
して言った。気づけば辺りはすっかり暗くなっている。

「そうだな、助かったよ。ほんと、ありがとう」

今まで、街中をあちろちらと案内してもらい、買い物できる場
所も教えてもらった。買い物が増えてらに近所の人に挨拶することもで
きた。今朝のお詫びとはいえ、何から何まで親切丁寧に教えてくれ
たのだ。

「うん。何でも聞いてね、何でも知ってるから」

隣で自転車を押す氷川さんは得意げで楽しそうだ。

「頼もしいな」

樹は感心した。

「実際に決めてあげたでしょ。バイトだってね」

白井さんもまた誇らしげに言ってみせた。

「ありがとう。ほんと感謝してるよ」

そう告げて、少し大げさに頭を下げた。

思いがけず、彼女達の働きでバイト先まで決めることができたの
だ。求人募集している所を良く知っているのは、さすが地元と言
うべきだろうか。樹はコンビニで働くことになった。予備校のカリ
キュラムと合わせてシフトを組めるのだから都合が良いだろう。

自分はといえば、

「……ハルのバイトはいつからだって？」

樹が、にやにやと人を小馬鹿にするように言った。

その表情が妙に腹立たしい。氷川さんは急に静かになって俯いて

しまい、白井さんは妖しい笑みを浮かべている。

理由は明解だ。これから自分が勤めることになったバイト先を面白がっているのだ。

見つかったバイト先、それは氷川さんの実家が経営するお店だ。

「明日からだよ。氷川さん、よろしくね」
下を向く氷川さんに軽く会釈した。

彼女達は健気にも色々取り計らってくれたのだ。樹のバイト先は早々と決まったものの、自分のバイト先はどこも今日のうちに決められるような所は無く、というより、今日中にバイトを決める理由など無かったのだけれど、地元の意地故か白井さんと氷川さんは一生懸命に探してくれた。しかしそれでも見つからなかったのだ。

だから氷川さんが携帯を取り出して『お父さんにウチで働かせられるかどうか聞く』と言い出した時は本当に驚いて、どうかいらないと言ってくれますようにと心から願った。

「うん。会計を勉強してたなら店のあれこれを任せられるって、お父さん喜んでたよ」

困ったことに了承され、しかも期待されてしまった。

普通は期待されれば喜ぶべきなのだろう。しかし正直困ってしまふ。かなり複雑な心境だ。何やらとてつもない重圧が押し掛かり、バイトならではの気軽さも無くなってしまった。簡単には辞められない。

それでも氷川さんが親父さんにかけてくれたことは感謝すべきことで素直にありがたい。

「助かったよ、ありがと。お母さんが良くなるまで世話になるね」
「うん……」

言葉の最後に気を使った。バイトが決まったからといって無邪気

に喜べない理由がそこにはあった。

現在、氷川さんの実家は大変な状況にある。

氷川さんのお母さんが重い病気にかかってしまい、ずっと入院しているらしいのだ。だから店を回す人手が足りないと聞かされた。

「すぐ良くなると思うけどね。明日は九時までに来てくれればいいみたいだから」

「そっか、了解」

暗がりの中で氷川さんは笑ってみせた。まるで心配無いから気にしないでと言っているかのようで、儚くて寂しい笑顔に見えた。だからそんな表情に胸が痛んで、目をそらす。逃げるように皆からほんの少し先を歩いて、親父さんの言葉を思い出した。

氷川さんのお母さんの容態、実際は樂觀できるものでは無いらしい。親父さんが電話越しに『実はですね、涼音には言うなと言われているんですがね』と詳細を教えてくれた。それはとても重い病気で深刻なものだった。氷川さんを隣に親父さんの話をこっそり聞くのは後ろめたい気がした。しかもそれを知ったからといって、何かの役に立てるわけもなく、ただ知ってしまったことの罪悪感が残るだけだった。できる事といえば、明日から与えられる仕事を懸命にこなすという慎ましいものでしかない。

後ろを振り返って氷川さんに目をやれば、樹や白井さんと楽しそうに笑い、盛り上がっていた。辛い現実にも直面しても明るく振舞えるのは心が強い証拠なのだろう。だからそんな氷川さんが格好良く見えて、羨ましく思えた。いつかは自分もそんな風になりたいと。

分かれ道を前に、彼女達と別れた。樹は手をぶんぶんと振って、また来てねなどとぬかしていた。

「さてと、帰るか」

未だ、暗闇の彼方を名残惜しそうに見つめる樹を促して自転車をまたぐ。車も人も通らない田舎道、片側に続く田んぼには街灯がゆらゆらと映っている。明るい列車の中からではなく、こうして暗がりの中に佇んで始めて、夜の田舎がそれなりに明るい事に気づく。月明かりも明るく、優しい金色が夜道を照らしていた。

「幸先すげー良くね？」

息を切らせて横に並んでみせた樹は信じられないと喜んでいた。その表情につられてか一緒に嬉しくなる。朝は最悪でも、結果として何もかもがうまく運んでくれたのは紛れも無い事実だ。

高校卒業したばかりの自分達にとって、学校に行かず勉強するだけの田舎では友達を作る機会は無いだろうと諦めていた。ところがどうしてか、今こんなことになっている。

きっかけはあまり喜べないけれど、こんな形で知り合いができたのは予想外で、とても嬉しい。それに一人でも現地で知り合いができれば芋づる式に増えていくかもしれない。疲れた時にする溜息ではなく、何かをやり遂げた時にするような、ほんの少しの嬉しさを含んだ溜息をして首をほぐした。

「そうだな。バイトも決まったしな」

半ば無理矢理ではあったけれど、これで生活の心配は無くなった。

「氷川さんと一緒に頑張つてこいよ、同じ浪人生なんだし」

「……そういや、そうだったな」

昼間、氷川さんに何処の大学に通っているか聞いたのだ。すると氷川さんは困った顔をして『お母さんが大変で大学行けなくなったから』と教えてくれた。あの時の表情を思い浮かべると、今更なが

ら聞かなければ良かったと後悔する。目指していたのは美術大学だ。

「美大を目指してるってことは、樹と一緒にか」

樹もまた美大志望だったはずだ。

「いや、俺はグラフィック関係だけど、氷川さんは絵画関係だろ」

まったくの別物だと、樹は告げた。どちらも絵のような気がするが、本人達には明確な区別ができているのだろう。

「それで白井さんが看護士専門学校か」

あの誰とでも仲良くなれそうなフレンドリーさは、確かに看護士という職業に向いているかもしれない。ただし毒舌が過ぎる。今日一日でかなり堪能してしまった。初めて出会ってああなのだから、くだけた仲になれば、更に酷いかもしれない。いつか白井さんに看てもらおう患者達のこと少し心配になった。

こうして、あれこれ思い返せば、本当に色々と教えてもらったと気づかされる。聞かなければ良かったと、後悔する場面もあったけれど結果としてお互いの背景を知ることができた。知らずのうちに頬が緩んでしまう自分が恥ずかしくて、スピードを緩めながら樹を先に行かせた。腕時計を見ると二十一時を少し過ぎていた。東京なら、店も閉まらず夜はこれからという時刻だ。騒がしくて騒ぎたくて、何をしようかと企んでいる、そんな時間帯だ。

前を走る樹がこちらを振り返った。

「ハル、お前はどうすんだよ」

幾分、真面目な口調で尋ねてきた。

「俺ね」

樹と氷川さんが美大、白井さんも専門なら俺は、といった具合なのだろう。結局、樹にとっては一番知りたい事なのかもしれない。

「そうだな」

一休止置いて、考える。樹との仲は年齢と同じだ。樹の母親と自分の母親が幼馴染であり、家も近所にあった。樹は生まれた時から傍に居て、兄弟といっても過言ではない程の毎日を遊んで育ってきた。

真面目な相談を真摯に理解してくれる、数少ない親友と呼べる存在だ。例え、弱音を吐いても馬鹿にはしない。そう信じる事ができる友人だ。

だから本音を告げる。

「全然分らないんだ。今のままじゃ駄目だ、とは思っただけだよ」
こんな考えを抱いてしまう自分は駄目な人間なのだろうか。

これから大学を目指すのか、それとも就職するのか、それさえも決めていない。決めていないというより、そうする必要が無いような気さえしてしまう。もちろん、それが誤った幻想であることは分かっている。このままではいけないと、焦る気持ちだっている。でもやる気が起きない、したい事がないのだ。

だから、これからどうすると聞かれても正直分かるはずもない。そんな心境を察してか、樹は遠くを見つめながら気を使って答えてくれた。

「そか。それなら、いつか頑張つて、田舎に家でも建てようぜ」

田舎暮らしにそこまで憧れてはいないけれど、樹は何かを頑張るための口実として言ってくれているのだろう。その優しさは、相変わらずだ。

「そうだな。まずは明日からバイト頑張ってみるわ」

行動しなければ、先には進めない。頬が引き締まるのを感じて明

日へのやる気を振り絞る。

ここに引越して来て良かった。まさに今日、そう思う事ができたのだ。些細な変化だけれど、明日を期待する気持ちを思い出すことができた。ただ日付が変わり、朝を待つだけの明日とは違う。

冷たい空気に体を震わせて、ペダルを押し込み家路へと急いだ。

氷川商店

翌日の朝。目頭に暖かさを感じてゆっくりと目を開けた。

目蓋を擦りながら起き上がり、しばし布団の上でぼんやりする。

なんと爽やかで清々しいのだろうか。

高窓から朝日が差し込む静かな部屋。警官の声も、乱暴な手も見当たらない。思わず小鳥達と一緒に鼻歌を口ずさんでしまうような、素晴らしい朝を向かえることができた。昨日とは大違いだ。

それだけではない。今日は、記念すべきバイト初日でもある。

疲れが残る体を引っ張って、約束の時間に遅れないようにと身仕度を始めることにした。朝食を済ませ、歯磨きを済ませ、髪を整えて、無難な服をチョイスして鏡の前で気合を入れる。

今から家を出れば約束の九時には余裕を持って到着するはずだ。そう考えると、緊張からか、そわそわして止まらない。

いざ玄関を飛び出して、靴を履きながら庭の倉庫へと駆けて行く。「田舎に来たって感じたな」

踏みめば押し返してくる柔らかい土の感触も、四季を感じさせてくれる風の匂いも、田舎ならではだ。

倉庫の中に入り、壁にもたれかかっている使い古した自転車を引っ張り出す。現役を引退したと言わんばかりの錆付いた自転車も、昨日今日と使い、更にこれからまだまだ働いて貰うつもりだ。

自転車に乗り込んで、ペダルを踏み込むと驚くほど前に進んだ。ペダルが軽く感じるのは逸る気持ちからなのか、それとも新しいことを始める嬉しさゆえなのか、どちらにしろ悪い気はしないので、ぐいぐいと漕いでゆく。四月を目前に控えて、春らしい暖かい風が後押しするように吹いて気持ちが良い。

地図を手がかりに「氷川商店」を目指す。

古都の雰囲気を醸し出す町並みを走り抜けて、ようやく目の前へと到着した。朝市のたつ、川沿いの道路に面した一画。賑やかな人ごみが行き交う中に氷川商店は佇んでいた。

野菜直売店や土産屋が、ずらっと並び、威勢の良い掛け声があちらこちらから飛んでいた。

自転車を道端に止めて人ごみに紛れ込む。人と人の隙間をすり抜けて、ようやく氷川商店に近づくと、遠目でも分かるほど店内は客でひしめき合っていた。そんな雰囲気に一瞬躊躇して、恐る恐る暖簾越しに覗きこむと、忙しく動き回る氷川さんと多分そうであるうと思える親父さんがそこにいた。

さて、どうしたものかと思案する。

氷川さんも親父さんも声をかけられる状態ではないのだ。レジの周りには人ばかりができていて、声をかければ迷惑をかけるはずだ。自分としても、客と同化しているので気づいてはもらえない。それでも、このままではいけないと、レジ脇に近づいて親父さんらしき人に声をかけることにした。

「あの、すいません。秋津ですけど」
向けられたのは、点となった瞳。

しばらくの沈黙を過ぎてから、今度は瞳を大きくした。

「お、おお。早いね！よろしく」

忘れてましたよね、という言葉を飲み込んで返答する。

「いえ、忙しいのにすみません。よろしく願います」

人ごみから様子を見るに、開店時刻は朝早いのだろう。朝市がたつならば七時か八時のはずだ。書き入れ時に手を止めてしまった事に焦りを感じる。

「全然、構いませんよ。私が氷川です。これからよろしく頼みます」
親父さんは、深々と頭を下げた。その声は、やはり昨日の電話と同じ声だ。柔らかな物腰に加えて丁寧な口調、一目見るだけで分かる良い人だ。

「これからお世話になります」
応えるように頭を下げて、あまり期待しないで欲しいと願う。土産屋で働くのは始めてなのだから。

「それでは皆に挨拶しましょうか。こっちに来て下さい」
親父さんは手招きしつつ、レジ脇から店内の奥へと進んで行った。
振りかえって店内を見れば、氷川さんは客の対応で忙しく、自分が来ていることさえ気づいてないようだった。

やがて倉庫を通り抜け、裏口の扉も過ぎて路地を歩くと立派な蔵のある屋敷に辿り着いた。

親父さんは首に巻いてある手拭で額の汗を拭い、
「皆を呼んでくるからね。ちょっと待ってて」と言って白壁の大きな蔵の中へと消えていった。

ぼつんと一人残されて、辺りを見渡す。

氷川家であろうこの敷地内には、蔵の他にも住家が幾つかあつてとても広い。庭も何処かの庭園のように風流がある。一回でもいいからこんな家に住んでみたいと、適いそうにない夢を描いていると、蔵の中からぞろぞろと沢山の人が歩いてきた。

職場

結局、氷川商店に戻れたのは十二時を過ぎてから。

今まで、およそ三時間近く、蔵で働いている親戚筋と思われる人たちに挨拶をしていた。

何人もの人に自己紹介を繰り返すというのは中々大変だった。自己紹介から始まり、出身地、年齢、学歴、趣味にまで話は及んだ。どうせなら皆一斉に自己紹介できればと、半ばげっそりし始めた所で、ようやく全員に挨拶を終える事ができたのだ。

親父さんは『それじゃお店のほうを任せたいんだけど、後は涼音に聞いてください』と告げ、肩をぽんぽんと叩いてから『よろしく』と告げ敷地の奥へと消えていった。

今は、客足の途絶えた氷川商店で氷川さんを探している真つ最中だ。

「氷川さん、いる？」

恐る恐るレジ裏の休憩部屋を覗いた。いない。トイレの中も確認する。いない。失礼の無いよう、毎回ノックと挨拶をしながら未知のドアを開けるのだが、誰もいない。先程までの忙しさはどこにいったのか、店内に客は一人もおらず、ひっそりとしている。

「朝市の時間過ぎるところなるのか」

暖簾越しに道路を見て納得する。人がまばらにしか歩いていないのだ。シャッターが閉まっている店さえあった。

「これからどうすっかな」

氷川さんは見つからないままだ。かといって、探すためにここを離れるわけにはいかない。もし離れれば、店内に誰もいなくなってしまう。

仕方なく店内を探索することにして入り口付近を見れば、先程までは気づかなかった壁と同じ色をした扉があることに気づいた。倉庫か何かだろうと開けてみると、案の定、商品の幾つかが包装待ちの状態で畳の上に転がっていた。

「誰もいないな。泥棒来たらどうすんだよ」

そう言っただけ扉を閉めようとした時、不意に言葉を失った。

なぜかどうしてか自分の目に映る物が信じられず全身の毛が逆立った。静まり返ったその部屋には、まるで家具と同調するかのようにな、まったく動かないお婆さんが座っていたのだ。

「まさか……」

死んでいる、と言おうとして口を噤む。

注視すれば、小さく開いた口から、微かな寝息が聞こえていた。頭を垂れ、身動き一つしない様は、良く出来た蝋人形のように不思議な恐ろしさを漂わせていた。とにかく起こしてはまずいと、慌ててその場を後にする。

「……誰だい？」

部屋から退出して、あとほんの少しで扉を閉め終わるという瞬間。

お婆さんは「涼音かい？」とドア越しに尋ねてきた。その声に焦

り、どう言い訳をしようかと混乱する。

こちらの名前を言ったとして、分かってもらえるだろうか。知らない男が侵入して来たと、大声を出されたらどうしようかと動揺してしまう。

それでも正直に答えるしかないと、

「失礼します。今日から働くことになった秋津ですけど」

ドアを開けて「すみません」とお辞儀した。どうしてこの部屋に入ってきたのか、あんたは誰だ、などと聞かれませんようにお願い、お婆さんの言葉を待つ。

「そうかい、よく来てくれたね。よろしくね」

お婆さんにはにつこり笑って、深々と頭を下げてくれた。どうやらお婆さんにも事前に話は通じていたらしい。

「よろしくお願いします」と、同じように深く頭を下げた。

「お店の中は見たかい？」

「いえ、まだ全部は」

「そうかい」

そう言ってから、お婆さんはゆっくりと立ち上がった。目の前を通り過ぎ、徐に草履を履いて店内に入っていく。

「私は涼音を呼んでくるから、色々と見ておくといいよ」

腰に手をあてて、お婆さんは言った。その言葉に嬉しくなる。

「あ、ありがとうございます。そうします」

これで、ようやく放置状態から開放されるのだ。店内に一人は寂しかった。お婆さんは腰を叩きながら「頑張つてな」と言い残し、

レジ奥の通路へと消えていった。

「さてと。どれが何だって」

背伸びを一つ、やる気を奮い起こした。

お婆さんの言う通り、まず必要なのは商品知識だろう。生憎ここで売られているものについては全く知識が無い。入り口付近から順番に、商品を手に取った。味噌と日本酒とが主製品として陳列されており、それを補うように漬物、お米、土産物などが並んでいた。

これは思っていたより大変だ。まず料理に興味を抱いたことがない。自分で料理を作る時は、それなりに美味しければ良いと満足してしまっている。売る側にとって商品に関心がないのは致命的だ。

日本酒に限っては未成年で飲んだこともない。商品に愛着を持っていないのに、客に勧めることなどではしないだろう。

というより、

「おせえ。じゃなくて、遅い！」

客商売なら、どんな時でも汚い言葉を使っては駄目だと言葉を訂正した。

時計を見れば、お婆さんが出て行ってから三十分以上が経っていた。

先程までは例え客が来て応対に困っても、お婆さんが起きて応対してくれただろう。何とかなったはずだ。けれど今は本当に一人ぼっちだ。客が来たら、もはや「店員どこだよ」と言っただけの振りをするしか方法がない。

お婆さんの『頑張つてな』は『一時間ばかり放置するけど、頑張つてな』という意味だったのだろうか。人が恋しい。腹も減った。九時出勤で、既に十三時を回るところだ。

「……うまい」

心とお腹を慰めるように、試食用の漬物をつまんだ。口に入れた柴漬けは、こりこりとした食感はもちろんのこと、しょっぱ過ぎず薄すぎず、上品な味付けでとても美味しかった。ぱくぱくと、辺りの漬物をつまんで味を比べる。どの漬物も素朴で濁りの無い味わいが、文句なしに美味い。もう、これで腹を満たそうかとも考えてしまう。

全種類の試食を看破しようと歩き回っていると、突如、真後ろからドンという音が響いた。驚いて何事かと振り向くと、目の前にも自分と同じように驚いた表情があった。

「ハル君？何やってんの？」

目の前の氷川さんは慌てて来たらしく、荒い呼吸のまま驚いてみせた。『何やってんの』と言われても、放置されていたのだから答えようが無い。むしろ何かをやらせて欲しいくらいだ。

けれども、今の自分は右手に爪楊枝、左手に試食容器を手にしていた。加えて、口の中には漬物がある。喋るために口を開けられず、手で口を覆って高速で噛み砕いた。

「それ、美味しい？」

何とも答えられない姿に痺れを切らしたのか、氷川さんは『ご飯食べてないの？』と言うような眼差しを向けてきた。

「いや、別にお腹が空いてた訳じゃないよ？」

憐れむ眼差しに、男のプライドが嘘を吐かせた。そして後悔する。

本当は『ご飯、持って来てもらって良いですか?』と言いたいくらい腹が減っている。男のプライドなど、腹の足しにもならない。いつそ捨ててしまえば、どれだけお腹が喜ぶだろうか。

「そ、そう」

氷川さんは、こちらの言葉をどう受け取ったのか、ぎこちなく目をそらした。その仕草が嫌な予感を抱かせる。

「それよりお父さん何だつて?」

やはり昼食の話題は変えられてしまった。

「……詳しくは氷川さんから聞くようにしてさ」

親父さんから告げられた言葉を告げる。

「え? 本当に?」

氷川さんは驚いて目を大きく開けた。

その反応に、こちらの方が驚愕する。やはり知らされていなかったのかと。そうではないかと思っていたのだ。親子のコミュニケーションはどうなっているのかと、親父さんに『頼むぜホント』と言っ

てやりたくなる。

氷川さんも呆れたように笑って、

「しょうがないなあ、お父さん」とはにかんだ。

そして手馴れた様子でエプロンを着た。きりつとした横顔を見せて氷川さんは口を開けた。

「レジ打ち経験は?」

「あるよ」

「どこで？」

「時計販売店で」

「時計かぁ……」

なにやらメモ帳に一生懸命書きこんでいる。

「それでこの前までは、会計の仕事をしてたんだよね？」

頷いて返答すると、氷川さんはペンを口に当てて何やら考え込み始めた。

「接客はどう？ 苦手？」

「得意だよ。超得意」

「本当に？」

疑るような視線を、わざとらしい笑顔でかわした。実際は得意でも不得意でもない。求められるなら応じる、それだけだ。

「うーん。平日は電話注文が多いから、そっちが主な仕事かな」

接客は私がするし、と付け加えた。

それはそれで、何だか戦力外通知を受けたようで釈然としない。

「それじゃあ早速レジ打ちからやってみようか」

氷川さんは、なぜか上機嫌で鼻歌を口ずさんでいる。

レジ打ちの仕方、商品知識、注文の取り方、氷川商店の歴史、家族構成、氷川さんは途切れる事なく情報を遣してきた。そんな高速に回り続ける口を眺めて確信する。氷川さんにとって、自分が始めての部下に違いないのだと。仕事を人に教えた事が無いのだろう。仕入先との揉め事など、今言われても困るだけだ。

ひたすら文字を書き殴って、シャーペンの芯を力チ力チしている
と、氷川さんは一呼吸おいて「あと、みんな氷川だから名前で呼んでね？」と付け加えた。

「名前？」

「う、うん」

言うことは、もっともだ。

「えと、涼音って呼んでくれればいいから。学校でもそう呼ばれてたし」

顔を真っ赤にして、そう続けた。

その姿に固まってしまふ。それは無理だ。

どう考えても上司である氷川さんにそんな呼び方はできない。

「あい、じゃあ涼音さんで」

行使したのは分かった様で分かっていない、とぼけたフリして納得する作戦だ。

そもそも『涼音』なんて親父さんの前で呼べるわけがない。幾ら温厚な親父さんでも嫌な顔をするに違いない。

氷川さんは不満そうに、違うと言いたげなので、話題を変える。

「あとさ、持ってきた方がいい物ってある？」

カッターとか必要？と言ってみせた。

氷川さんは一瞬言葉につまりながらも、投げやりな口調で「カッターはあるからいいよ」と言ってみせた。結局、それから洪水のような講義をメモして、一通りの実習を終えて初出勤は終わった。

昼食をとれなかったのは言うまでも無い。

鈍感

働き初めてから、ひと月。

四月も後半、桜は世代交代して染井吉野に代わり八重桜が散り頃を迎えていた。

気づけばあつという間の出来事だ。早寝早起き、時々夜更かしでまさに青春を謳歌している。

もはや週末の休日を楽しみにしたり、まだ。。時なのかと溜息をつくことも無くなっていた。そしてそれを思い出す時に溜息がでてしまうのだ。

ついこの前の日常、高校生であった時。授業中には何度も時計の針を追って溜息をつき、放課後は楽しくもないバイトで忙しく働き、草食動物のように寝てはふらふらするの繰り返しをしていたと願っていた。

もちろん休日はそのように過ごしていたのだが、願った通りに一日を過ごす、無駄に過ごしてしまったやるせなさに襲われた。そんな時期があったなとぼんやり考える。

「ねむい」

氷川商店の店先にある畳椅子に座って日光を浴びる。ここは試食をするための、ちょっとした茶飲み所だ。

眠気を誘う春の陽気は、体の中の悪いものを消毒してくれそうで気持ちが良い。周りを見渡せば、どの樹木も緑を装いつつある。書

き入れ時を過ぎた今の時間が数少ない幸せの時間だ。癒されるなあとしみじみ感じてうつとりする。

今のこの仕事、氷川商店での仕事は、はっきり言って暇そのものだ。朝市の立つ七時から十時の間は忙しいものの、他の時間はのんびりと過ごせる。

以前のバイトを思い返せば、時計屋は忙しくて休憩どころではなく、会計事務所さえも数字との格闘で目と肩が疲れて大変だった。それに比べれば楽で仕方が無い。

お客さんの愛想も良く、声をかけて無視されることも無い。最近では質問されてもどうにか答えられるようになってきた。だから、やりがいも感じられるようになってきた。

労働環境の良い職場だと考えながら、ほづきを片手に、うとらうとらする。

「あつたけーな、ほんと……」

きつと、こういうのを春うららと言っのだろう。

「ハル君、大丈夫？　すごい眠そうだよ？」

いつの間に隣に居たのか、氷川さんが顔を覗かせていた。いつものエプロン姿に、親父さんの健康サンダルを履いている。

「今日暖かいよね」

うつらうつらしていた言い訳をする。

「うん、あつたかいよね。眠くはならないけど」

きっぱりすっぱり氷川さんは言った。

すっかり上司らしくて困る。つまりは眠気を払拭しろと言っているのだ。

氷川さん自身、レジ脇に座りながら時々居眠りしている時がある。自分は、どんなに眠くても寝る事は絶対にないと言ってやりたい。

しかしそれでも、今日の春らしさは恐ろしいくらいに眠気を催し、心をうすら状態にしてしまうのだ。

「さて、掃除頑張るかな」

頑張ってますよと、アピールするために声にだした。
椅子から立ち上がって、風に運ばれた花びらを集める。

「ねえハル君。もうこっち慣れた？」

その声に振り返れば、氷川さんは嬉しそうな表情をしていた。

「いや、まだまだかな」

掃く手を止めて遠くに望む山々を見つめた。

「むしろ慣れたくないよ。楽しいし」

今は毎日が新鮮で楽しい。この新鮮さが無くなってしまうなら、そちらの方が怖いくらいだ。

そう言つと、氷川さんは、

「いいな。私もどっか行きたい」と残念そうな笑みを浮かべた。
「……」

桜の花びらが舞っているせいか、その笑顔は儚くて、寂しさが垣間見えた。家庭の事情を知っているだけに、無言という返事をするしかない。

「描いてみたい絵は沢山あるんだよ？」

待ちきれないように顔を綻ばせて、氷川さんは青く澄んだ空に筆を滑らせた。大学に行きたいと、そう瞳が語っている。

「いいね。俺も絵、描いてみようかな」

もしかしたら熱中できるかもしれないと笑ってみせる。

「そういえば、ハル君はこの大学行くの？」

畳椅子から身を乗り出して氷川さんは興味深々な瞳をよこした。

「んー、どうしよつか。行く気もないんだよね」

自嘲気味に言ってみせた。

最近は毎日が楽しくて、将来を考える暇がない。

同年代の友達の中にも、フリーターのままやりたい事を探している連中が沢山いる。やりたい事も無いまま大学に行き、勉強ばかりに励んでも仕方がないと、自分は思ってる。今は、やりたい事を探すほうが優先だ。

「え。……本当に？」

氷川さんは、冗談を言っていると思ったのか、苦笑いを浮かべた。

「何かさ、やりたい夢が見つかるまで、ここに住んでるかな」

水も空気も野菜も、ここは全部が美味い。いっそ、氷川商店に就職でもすれば楽しくなるのではないだろうか。こんなぽかぽかの陽気が続くなら、それも悪くない。

「夢とか……ないわけ？」

「ないない、さっぱり無い」

夢があつたらこんな所にはいないと笑つて、遠くに見える山並みに向けて背伸びをした。

「……」

風がさらさらと吹いて沈黙が訪れる。

反応が無いまま、不思議に思つて振り返ると、畳椅子に氷川さんは居なかった。

暖簾越しに店内を覗けば、背を向けたままレジ脇から倉庫の方へと向かつていた。ここを去るなら、せめて一言告げてくれればいいのに、その背中は何だか怖そうだ。

そこまで考えて、ふと立ち止まり、嫌な感じが頭を過つた。

手にしていた箒は滑り落ちてカタンと地面を鳴らした。

「まさか」

急いで箒を拾い、壁に立てかけて店内に入る。

氷川さんを怒らせてしまった。

きつとこの仮説は正しいはずだ。

あろうことが夢を追いたくても追えない、大学行きたくても行けなかった氷川さんの背景を忘れてしまった。今更になり、ようやく事態の重要性に気づく。

店内を巡り、言い訳をしようと姿を探すも、やはりその姿は無くなっていた。

「やっちまった」

本家に行ってしまったならアウトだろう。

平日の昼過ぎとはいえ、ごく稀に客足はあるのでさすがに本家まで追って言い訳することはできない。それに謝罪を受け入れられるかどうか分からない。

どうしてあんな発言をしてしまったのだろうか。どうして口に出す前に気づけなかったのだろうか。

春のせいになどできない。自分への腹立たしさから溜息を吐いて、重く感じる足を引きずって再び花びらを片付けようと店内を後にした。

反省会

鈍感さを遺憾なく発揮してしまった、その日の夜。

「……ということをしちゃったわけよ。デリカシー無かったな」

夕食時、冷たい麦茶を一気飲みしながら愚痴をこぼした。思い出すだけでもやるせなくなってしまうのだ。

あれから冰川さんに再び会えたのは、一時間経ってからのことだった。

すぐに近づいてひたすら頭を下げた。

けれど冰川さんは「何のこと？」と言っばかりで素っ気なく、そんな亀裂の入った関係を修復できないまま一日は終わってしまった。相手の背景を考えずにあんな事を言ってしまった自分が憎い。

「そりやお前、もうちょい考えろよな」

樹がもつともらしく箸で人をさした。

「箸で人さすなよ。ってか、これからどうしよ」

幾ら悔やんだとしても、もう過ぎたことだ。くよくよ考えても時間は逆行しない。考えなければならぬのは、これからのことだ。

「夢、探せよ」

味噌汁に口をつけて、樹はしれっと言った。

「夢か……。何か楽しい事でもあればな」

ぐったりと天井を見つめて、自然と口を開いたら懐かしい言葉が出た。

『何か楽しい事』

封じたはずの昔からの口癖だ。引越して来る前はそれこそ毎日のように言っていた口癖だ。刺激が欲しかった。どんな刺激かと言われれば困るけれど、とにかく刺激が欲しかったのだ。

「お前は欲張りなんだよ……」

だるそうな瞳を寄越して樹は言う。

「欲張り？」

「そう。俺なんか毎日勉強で忙しくて、そもそも楽しいも何もないからな」

勉強ダコができてしまったと中指を見せた。

「忙しさか。忙しさも、はまれるものも俺には羨ましいけどな」

目標を持っている人、今を夢中になっている人、そんな人達を見ると酷く羨ましく思えてしまう。

毎日それだけに没頭し必死になれる。それだけに笑って、それだけで楽しんで、それだけで泣ける、そんなものが自分にも欲しいのだ。

「じゃあ億万長者でも目指せば？」

投げやりに、いかにもどうでも良さそうに樹は言った。

「それも何か違うんだよな」

名声・富・権力、どれも手に入るなら越したことはない。けれど

必死になつてまで手に入れたとも思わないのだ。幸せとは、何か別なものの気がする。

「なんじゃそりゃ」

呆れ顔をして樹は立ち上がる。そのまま茶碗を片付け始めたので、進展の無い話は終えることにした。

「とりあえず……、明日もつかい謝って仲直りしとくわ」

今、何よりもやらなければいけないのはそれのはずだ。

「そうしな、そうしな」

樹は台所に向かう途中で叫ぶようにして返答した。

素直に謝って、仲直りして、可愛い氷川さんと仲良くしますかと、無駄にポジティブ思考を働かせて、その日を後にした。

梅雨

「さむ……」

白くなる息をふうつと吐いて、寒さを奥歯でかみ締める。

季節は六月も後半だ。今日も雨はしんと降り続いており、明日も明後日もぐずついた天気は止みそうにない。

仕事に携わる毎日、気づけば木々は緑の葉をうつそうと装い、周りの景色も濃い緑で賑やかになっていた。そんな気持ちの良い夏の始まりは楽しんでいたのに、梅雨に入り雨が降り続けると鳥肌が立つほどに寒くなる。朝から晩まで雨が降り続けると余計寂しい。

店内は外の気温と大して変わらず、寒い時にはそれこそ寒いので、今日は暖かい格好をと薄手のパーカーを羽織ってきた。客足も途絶えた雨の中、賑わいのない店先の道路には水溜りができていて忙しく波紋を広げている。そんな雨景色を見て暇を思い出し、パーカーのフードをかぶってレジカウンターの脇に座った。

次いで、フードの中から目線を悟られないように俯いて、気になる人物を目で追うことにした。

その人物は相変わらずこちらを気に入らない対象と見ているようで、寂しい店の雰囲気明るくしようともせず、するべき仕事がないのなら休めばいいのに、ひたすら忙しそうに商品の埃を払っていた。

そんな姿を見て、寒さも相伴ったのか自分の心が落ち込んでいく

のが分かった。さーっという雨音が店の中を満たして尚更寂しい。

思えば無神経トークを重ねてしまったあの日から、かなりの日数が経ってしまっている。四月の終わりから六月の終わりなので、ふた月程経過しているのだ。

すぐに仲直りできる、という考えは非常に甘かった。事態を樂觀的に捉えすぎていたのだ。得意のポジティブ思考は通用せず、謝っても『そんなこと気にしてないけど?』と氷川さんは言うだけだった。

いつもいつも反応はひんやりと冷たい。当たり障りの無い近況の話をふっても『そうなんだ』とか『良かったね』とか、会話が続かない反応を返してくる。

つまりは適当に流されているのだ。梅雨もそろそろ終わりに近づいているというのに、どうにもこうにも冷めた関係は終りそうになり。回復する見込みも見えないままだ。

「雨のせいならいいのにな……」

相変わらずこの景色はきれいで、仕事場までの行き帰りは気分が高揚するのだが、冷たい氷川さんの態度でどうもげんなりしてしまふ。

フードの陰からチラ見する氷川さんは、自分が座っている事が気に入らないのか、時々こちらをチラリと見てはやめていた。基本は控えめで大人しくても、腹の中ではどんな事を思っているのか分からない。もしかしたら聞いてびっくりな恐ろしい言葉を心の中で言っているかもしれない。『あの、甲斐性無しめ』くらいには思っているのかもしれない。

毎度のことだが氷川さんでさえ、さぼっている時がある。撮り貯めたドラマを見るために、自分に仕事を丸投げするのだ。自身に甘く、人に厳しい氷川さん。

せめて始めての部下なのだから優しく扱って欲しい。

「さっむ」

入り口から風が吹き荒んで鳥肌をたたせた。

寒さには弱いのだ。とりわけこの田舎はよく冷える。どこかの山から嵐と呼ばれる、冷たい風が下ってくるのだ。

縮こまるように丸まっていると、もしかして氷川さんがピタッと手を止めて、こちらをふっと一瞬見た。そして遠い眼差しで、少し悩むしぐさをしたので、

「さてと、客注文の整理でもするかな」と、叱られる前に仕事に戻ることにした。

もちろん客注文、もとい電話注文の整理など、する必要はない。毎日、自分が整理整頓きちんと扱っているのだ。

「どうしよう………することがない」

客注整理を五分たらずで終らせ、再び呆ける。

残る仕事は掃除くらいなもの。けれど掃除するといっても、どこもかしこも先程したばかりで、していない場所などない。加えて、現在進行中で氷川さんが掃除している。あまりにも暇で、つまらなくて半ば自暴自棄になる。

「叱られてもいいか」

どうせ、する事ないのだ。氷川さんと仲良く話せていない今、小言でも聞けば賑やかになってマシではないかと、どうしようもない案を考えた。とにかく暇をもてあまして処理できない為、何を言われようが座ってぼうつとすることに決めた。

レジ裏の休憩部屋から小さなハロゲンヒーターを持ってきて、レジ脇にスタンバイさせる。外気にさらされる店内で、足元を暖めるだけの簡単な暖房器具だ。こんな暖房器具をひっぱりよりも、暖かい格好をしてくれば良かったのだが今更ばやいても仕方ない。

「さむ。雪振るかもよ、これ」

勝手に暖房をつけて暖をとるのだからオーバーに言い訳しておく。このヒーターも、もう使わないと思っていた。梅雨に入るとここまですで冷えるものかと感心する。それでも十度位なのだが、とにかく寒いのでヒーターを自分の手前に置く。電源を入れてしばらくすると、何とも気持ちのいい暖かさが自分を包み込み始めた。

蕩けてしまいそうで、幸せが身に沁みる。しばらくの時間を経て、幸せの絶頂に到達したため、どこから沸いたのか何者をも恐れぬ勇氣を得ることになった。ちらちらと、落ち着き無い様子でこちらを見る氷川さんをぼうつと見つめ返す。フードを脱いで一直線に氷川さんを見据える。

「することないんだ、しょうがないじゃんか」

自分の行動を正当化するように、小声で言い聞かせる。視線の先には手が冷えてしまったのか、手を口元に寄せては吐息で温めている氷川さんがいた。正直可愛い、じゃなくて可哀想だ。

自分はいえ、暖気でぬくぬくと頬を赤らめのぼせている。け

れど氷川さんは言いたい事を我慢して、寒さも我慢して、暇も我慢して働いているのだ。『お茶でも入れるから暖まらない？』と氷川さんに言えたら、どんなに大物だろうか。小一時間も氷川さんをほったらかしにして、時々寄せられる視線にものぼせた瞳で見つめ返し、今更になつて暖に誘える程、できた性格はしていない。

それでも、この寒さのゆえか氷川さんの動きがぎこちなくて本当に寒そうだ。

「……涼音さん」

今更声をかけても遅い。けれども、声をかけなければ後々、更に後悔するだろう。そう決意して声をかけた。氷川さんは案の定ぴたっと手をとめて、きょとんとこちらを見つめ返した。

「続き、俺するよ」

ずつと暖まってきました、すみません、と心の中で謝った。どうせ店中を決まったルートで、ぐるぐると回りながら整理と掃除するだけなのだが、そう言つて立ち上がる。

「ついでにお茶も煎れるからさ」

これも断られたらどうしようもないので、返事を聞かずにレジ裏の休憩部屋に向かう。その行為が、いつかの朝のようで笑つてしまふ。

お茶を煎れて店内に戻ると、氷川さんは不満そうな顔をして待ち構えていた。恐る恐る声をかける。

「そいじや続きするよ。雑巾貸して」

空拭き雑巾を受け取ろうと手を差し出した。

「いい。一通りしたから」

「……」

もう手を差し出しているのだ。それなのに拗ねた表情でそんなこと言われても困る。もし氷川さんが樹ならば『いいからよこせバカが』とでも言って奪えるのだが、氷川さんにそれはできない。

それに今は氷川さんが視線を斜めにして瞳を合わせようとしない。暖房とお茶を勧めるといういきなりの好意に戸惑っているのか、微妙な表情だ。

幾ら考えても、もはや掃除と商品整理以外することが無いわけで、「商品を覚えるついでに掃除もするから」と、氷川さんが持つ雑巾を一瞬の隙について奪い取った。さりげなく、スリのように抜き取った。

当然のごとく、その行為に驚いた氷川さんはますます不満そうな顔をしたので、さっさと退散することにした。

「雷……鳴らんかな」

奪い取った雑巾を片手に店の入口へと赴き、藍色の暖簾を押しやって、雨を落とす灰色の空を見上げた。

願うのは梅雨が終ることだ。雷が鳴れば梅雨の終わりを知れる。そうすれば、この心も幾分晴れるに違いない。ふと氷川さんを見ると、未だ意味ありげな視線を寄越していた。

「案外、しつこかったりしてな」

目線が合うと、慌てて逸らす。

気まずいムードにも、慣れつつある自分が恐ろしい。

こうして、微妙なやり取りをするだけで夜になり、一日は終ってしまっただ。振り返れば何も変わっていない。いつ変わるかさえも分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1660y/>

灯夢

2011年11月21日12時44分発行